

日本とドイツの造形美術教育の現状とこれから

廣瀬 敏史

要 旨

本研究は、日本とドイツの美術教育の比較を通してこれからの造形美術教育が果たす役割を考察するものである。2000年から始まったOECD（経済協力開発機構）のPISA調査（国際学力到達度調査）は、日本とドイツの教育に大きな影響を及ぼしている。PISA調査で明らかになった学力低下とそこからの回復、知識基盤社会化やグローバル化の中での創造的な人格育成など、両国の直面する課題には共通点が多い。そんな中、造形美術教育においても学校教育全体の中での役割や教科としての存在意義をとらえ直していこうとする変化が見られる。両国の学習指導要領や、造形ワークショップの取り組みを検証しながら、今後の造形美術教育の望ましいあり方を考察した。

キーワード：日本の造形美術教育、ドイツの美術教育、造形ワークショップ、PISA調査、コンピテンシー

I. はじめに

造形美術教育においてまず大切にされなくてはならないのは、ものを作る楽しさや創造する喜びを教える、ということである。良い文学作品を読んだ後に受ける感動や、鳥の鳴き声を聞いたり自然の恵みの中で感じる安らぎは、決して頭で理解したものではないはずである。それと同様、造形美術教育でも、頭で理解するのではなく心や感性で感じる事がまず大切だと考える。小学校の図画工作、中学校の美術科学学習指導要領の目標に「感性を働かせながら」や「情操を養う」が記されているのは、豊かな感性や情操を持つことが生涯に渡って働く「生きる力」に繋がると考えられているからだろう。

本研究ではまず、この「生きる力」を育むために小学校の造形美術教育において現在どのような取り組みがなされているのかを、現行の学習指導要領を中心に検証してみたい。特に「共通事項」や「言語活動の充実」など新たに導入された項目は、現在の造形美術教育が直面する課題や、これからの方向性を示唆していると考えられる。

さらに新たな学びのスタイルとして定着しつつある造形ワークショップの取り組みを、2つの実践例を通して紹介する。文脈の中で課題を解決したり、体全体の感覚を働かせる造形ワークショップは、現在の造形美術教育が求める能力を高いレベルで実現すると私は考えている。

また本研究では、客観的でグローバルな視点を持つ意味でドイツの美術教育の現状を紹介する。日本よりも深刻な学力低下の危機から立ち直ったドイツで、美術教育はいかに存在意義を示していったのか。コンピテンシー

（資質、能力）指向の学習と学校外施設との活発な連携から見えてくるこれからの新しい造形美術教育のあり方を検証する。

尚、本研究では日本の小学校の図画工作を指す言葉として「造形美術教育」、ドイツの基礎学校（日本の小学1年～4年）の美術を指す言葉として「美術教育」を用いる。

II. 現在の日本の造形美術教育の現状

①見栄え重視の弊害

先日私の小学4年生の息子が、学校の図工の時間に制作したという木版画を見せてくれた。それを見て私は「すごい」と思った。大根をモチーフにしていたのだが、彫刻刀で掘り取られた部分が虹色になっていたからである。どのようにしてやったのかと聞くと、普通に黒インクで刷って乾かしたあと、紙を裏返してカラフルに着色したのだという。なるほどと感心して、それは自分で考えついたのかと聞くと、工作キッドに入っている絵の具を透かす特殊な紙を使って参考例通りやった、と言ったのでがっかりした。

ここに私は、日本における造形美術教育の現状の一端が表れていると思う。素晴らしい効果や色の体験を子どもにさせてあげようとするのは間違いではないが、それは大人に与えられた喜びであり、子ども一人ひとりの発見や気づきの機会を奪ってしまっていると思う。この見栄え重視の姿勢は、ある種のマニュアル化や固定観念という弊害を生む可能性がある。この年齢の子どもは、彫刻刀を使って掘る事、ローラーで黒インクを乗せてそれ

を紙に写し取る事だけで充分である。大人が余計な演出をする必要は全くない。むしろそれが木版画とはそういうものだという思い込みを生みかねない。

私がここで言いたいのは、ものには順序があり、それを自分で勝ち取っていかなくては、それは本当の自分の資質や能力には繋がらないということである。たとえその結果が見栄えがよくないものであったとしても、それは紛れもなくその子ども自身であり、そういうところからしか自信や自己肯定感は生まれないのではないだろうか。

②現行の学習指導要領の概要

では実際の学校現場では、どのような学習指導要領の下で指導がなされているのだろうか。平成23年に全面施行された小学校の図画工作学習指導要領¹の構造と、指導の重点ポイントについてみていきたい。

まず図画工作科の教科の目標は、

表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。

となっている。現行の学習指導要領には、旧学習指導要領には無い「感性を働かせながら」という文章が加えられていて、感性の重要性が明確に示されている。

内容構成を見てみると、造形遊びなど材料から発想して制作する「A表現(1)」、自分の表したいことをイメージしてそれを絵や工作などに表す「A表現(2)」、作品を鑑賞する「B鑑賞」の3つの領域に分かれている。これらは必ずしも別々の活動として捉えるのではなく、お互

いに関連させながら指導することが求められている。「A表現」(1)と(2)は、インプットの仕方に違いがあるだけで作品の成果に影響を与えるものではない。また「B鑑賞」は「A表現」と一体化して扱う場合と、独立して芸術鑑賞等を行う場合とに分けられる。以上が、概ね改訂前の学習指導要領から引き続き継承された内容である。

改訂後の新学習指導要領に加わった内容は、主に次の4つにまとめられる。①「共通事項」の新設。②言語活動の充実。③美術館や地域の施設との連携。④他教科や幼稚園教育との関連を図ること。この中の「共通事項」とは、色・形・イメージを、全ての活動に共通に働いている資質としてとらえて、造形の基礎能力を育てていこうとするものである。

ではこれらの内容が今、造形美術教育に求められる背景は何だろうか。それを検証することで、現在の日本の造形美術教育の現状とこれからの方向性を明らかにしていきたい。

③日本の造形美術教育の重点事項

現行の学習指導要領において、各教科を貫く重要な指導のポイントとして「言語活動の充実」が位置づけられている。この主な背景としては、2003年のPISA調査での子どもの学力低下の問題²がある。この調査で、日本の子どもは読解力や応用力に問題があることが明らかになった。新たに改訂された学習指導要領では、この問題を克服するために、知識・技能を活用する思考力・判断力・表現力が重視され、その手だてとして言語活動の充実が盛り込まれた。なぜなら言語は知的活動の基盤としてだけでなく、感情や情緒、コミュニケーションの基

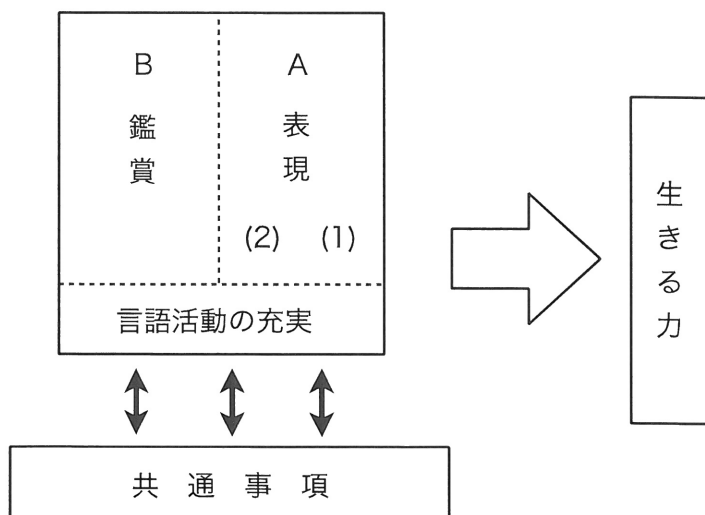


図1 日本の図画工作学習指導要領の構図(筆者作成)

盤だからである。

造形美術教育における言語活動は、(1)絵や工作といった造形言語を用いて体験から生じた気持ちや考えを豊かに表現すること、(2)作品のよさや美しさを鑑賞するとともに感じ取る力や思考する力を育てること、(3)自分の思いを語り合ったり自分の価値意識をもって批評し合ったりすること、と規定された³。

ここで示された造形言語という視点の延長線上に「共通事項」の新設があると考えられる。言葉や数字以外にも人間はコミュニケーションの道具として絵や造形を持っている。色や形、イメージなどを言葉のように使うことが出来れば、より豊かに生活や社会と関わっていきける。これが共通事項の設置された目的である。

私はこの「共通事項」と「言語活動の充実」は、人と人との橋渡し、もしくは約束事のような機能を持つ資質だと理解している。美術は個人的な活動であるがゆえになんとなく触れてはいけないものと考えられるかもしれないが、実はそれぞれ共通した基盤を持っている。それを気付かせてくれるのが「共通事項」であり「言語活動」なのではないだろうか。

「美術館及び地域の施設との連携」や「他教科や幼稚園教育との関連」が求められる背景としては、学校外での学習時間や学習習慣の問題、子どもの学習意欲の低さなどが挙げられる⁴。特に注目すべきは、PISA 調査において、日本の子どもは成績は上位クラスなのに、学校外の学習時間が参加 27 カ国中で最低の 27 位だったことである⁵。なんとなく意外な気もするが、日本では子どもの教育に占める学校の割合が大きいことが明らかに

なった。しかしこれは裏を返せば、親や専門家、地域の人々といった周りの社会が、他の国々に比べあまり子どもの教育に関わっていないということの表れとも言える。

このことは学習意欲の低さと全く無縁ではない気がする。学校でのフォーマルな授業だけでは、子どもは「何のための勉強なのか」を実感することは難しいだろう。低学年では幼稚園教育と関連づけて、中高学年では他教科と関連づけることで、子どもはより主体的に学習の意味や生活の中での活用方法を理解するに違いない。また美術館や博物館での鑑賞学習や芸術家とのワークショップは、子どもたちに社会や文化との繋がりを意識させ、新しいことに目を向けさせるきっかけとなるだろう。このような観点から、学習指導要領の重点として「美術館との連携」や「他教科との関連」が強化されたことが考えられる。

以下、現在の日本の造形美術教育が重点とするポイントを5つにまとめてみた。(表1)

III. 造形ワークショップの可能性

ここでは、造形美術教育における造形ワークショップの可能性について考察する。私はたとえ数度でもいいので通常の年間プログラムの中に造形ワークショップを組み入れることが良いと思っている。なぜなら造形ワークショップは、現在の造形美術教育が求める多くの要求を、一度に高いレベルで実現してくれると考えるからである。

ここに2つの実践例を紹介する。これらは共に美術館

(1)	表現活動や鑑賞を通して、感性を豊かにしたり創造する喜びを感じるようにする。	豊かな感性
(2)	知識や技能の習得と同時に、それらを活用する思考、判断、表現力を養っていく。	表現力
(3)	共通事項を生かした指導や言語活動を活発に行うことで造形言語などのコミュニケーション能力を高める。	コミュニケーション能力
(4)	子どもの発達に応じた連続性に配慮したり、他の教科内容に関連させ生活を美しく豊かにする造形や美術の働きを実感させる。	意欲、価値を見いだす力
(5)	美術館や博物館などの学校外施設と連携を深め、多様な教育環境の中で子どもの創造性を育む。	冒険心、広い視野

表1 現在の日本の造形美術教育の重点事項 (筆者作成)

や公民館という学校外施設で、小学生を対象に行われたものである。

①実践例1

- 題名 「世界に一つだけの人形&おはなし作り」
- 参加者 小学校1年～6年生 15名
- 実施日 平成25年7月25日, 26日, 27日
- 時間 25日 13:30～15:30, 26日 13:30-15:30
27日 11:00～15:30
- 場所 埼玉県所沢市小手指公民館分館
- 講師 人形劇劇団「劇団プーク」 渡辺真知子氏
- 活動の概要

一日目。冒頭、講師による絵本の朗読が行われる。本は「おおきな木」シェル・シュヴァスタイン作、村上春樹訳⁶。少年が望む全てのものを与え続け、最後は切り株になっても老人となった少年の腰掛ける椅子であろうとする木の話。講師から、この話をモチーフにした人形劇を行うとの説明があり、まずは全員でおおきな木の制作に取りかかる。脚立に段ボールを貼った木の幹に、細く丸めた新聞紙の枝と色紙で切った葉をくっつけていく。枝の班と葉の班に分かれて制作開始。新聞紙はなるべく堅く棒のようにすること、葉っぱは大きさや色、形を変えて自由に作ることが指示される。新聞紙の枝を幹にくっつける際は、三本一組で三脚のようにしてくっけると安定するとの説明がある。枝に葉っぱをテープでくっつけて、高さ2,5メートルほどのツリーが完成。残った時間で、青く塗られたトイレットペーパーの芯の中に豆を入れ、両側をホッチキスで止めてマラカスを作った。

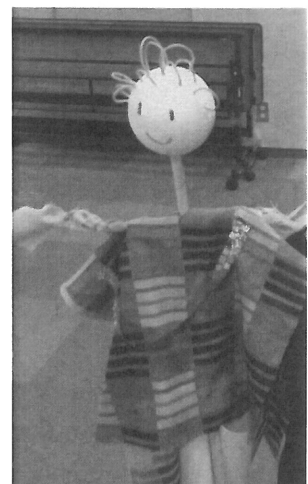


二日目はそれぞれの願い事を紙に書き出す作業から始まった。一つだけでなく、思いつく限り紙に書き出していく。その中から最も大切な願い事を選び出して紙に書き、それをヒコーキに折る。絵本の中で少年が木にお願い事をしたように、一人ずつ前に出て、大声でその願い事を叫びながらおおきな木めがけて紙ヒコーキを飛ばした。小さな声しか出せない女の子もいて、その女の子に講師は「お人形を作って、お人形にあなたのお願い事を

言ってもらおっか」などと声を掛け、全員で人形制作に入った。長さの違う木の丸棒を十字に組んだ芯に、発砲スチロールの球を刺して頭とし、新聞紙や布を巻き付けて身体を作る。思い思いの顔を描いたり、装飾を施して完成。その日の宿題は、人形の名前、性格、好きなもの嫌いなものを考えてくることであった。



最終日。まず子どもたちは、自分の人形を持って一人ずつ全員の前で人形の自己紹介をした。その後おおきな木をテーブルに乗せ、折り畳み式の長テーブルの天板を縦にして舞台を作る。私を含むボランティア数人が木の役となり、子どもたちの人形の願いに答えることになった。「子どもの夢に共感し、それが叶うにはどうすればいいか一緒に考えるような答えをすればいい」との講師からの指示を受ける。その間、子どもたちは人形の効果的な動かし方や感情表現の仕方を練習した。定刻の開演時間になり、保護者らがやって来て即興の人形劇が行われた。初日に作ったマラカスや音の出る竹細工などで、葉のざわめきや鳥の声などの効果音を出す。一人ひとり順番におおきな木の横に立って、人形を操って木にお願い事をした。以下は人形と木のやりとりの一例。





協力：人形劇劇団「劇団ブーク」

「おおきな木さん、こんにちは」「こんにちは」「願い事を聞いてほしいんだけど」「いいとも」「お空を飛ばたいんです」「そうか、空を飛ばたらきっと気持ちがいいだろうね。わたしの葉っぱの大きなやつをちぎってパラシュートにするといいよ」「そう、どうもあ

りがとう」「それじゃさようなら。がんばってね」

②実践例2

○題名 「入っちゃおう！」

おおきな おおきな 泡の中」

○参加者 小学校1年～6年生 27名

○実施日 平成25年6月22日

○時間 午前10:00～午後3:00

○場所 山梨県立美術館 総合実習室

○講師 藤原隆洋氏

○活動の概要

アーティストの藤原隆洋氏による造形ワークショップ。企画展「水をめぐる旅」に関連して水をテーマにしたワークショップであった。まず冒頭、藤原氏から「隊長の藤原です。今日は泡の中を探検したいと思います」との挨拶がある。次



に水の入った大きなフラスコに幼児用プールで使うエアポンプの先を入れ、子どもたちの前で水の泡を作って見せた。「この泡の中に入ったらどんな気持ちだろう」という問いかけに、子どもたちはそれぞれ想像をめぐらす。次に子どもたちに青い塩化ビニールの切れ端が渡され、これからこの材料で大きな泡に見立てたバルーンを作るという説明がされた。子どもたちは自らの想像と、手にしたビニールの材質感を確かめながら更にイメージを広げる。そこで藤原氏はビーチボールを取り出し、球体は展開すると複数のアーモンド型の平面になることを、実

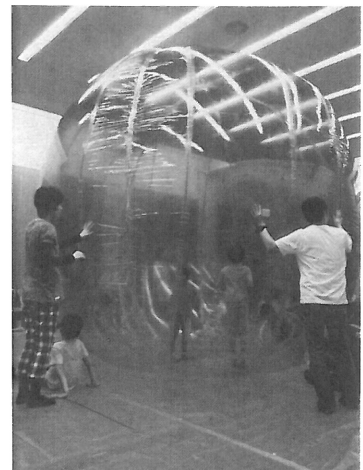


際に解体したものを使って説明し、事前の説明が終了。制作に入った。

子どもたちは3つのグループに分かれて作業開始。まず床に広げられたビニールの上に模造紙の型紙を置き、アウトラインをマジックでなぞる。そして型紙を外し、マジックの線に沿ってハサミでパーツを切り抜いていく。つぎに透明のテープで切り抜いたパーツ同士をくっつける作業。空気が入らないようにテープでアーモンド型のパーツの端と端をくっつけていくのだが、立体物を床で無理に貼り合わせているので接合部分にしわがより、子どもたちは苦勞していた。それでもなんとか、パーツを引っ張って伸ばす係、テープがよれないように引っ張る係、テープを押さえて貼る係、接着面の空気を指でつぶす係など、作業を分担して問題解決に挑んでいた。

昼食後、最後の貼り合わせを終え、いよいよ空気を入れる段階になった。結局は巨大なプロアーであつという間に空気を入れたのだったが、藤原氏は最初いじわるをしてそのプロアーを見せず、冒頭の説明で使った幼児プール用のエアポンプで巨大なバルーンの空気を入れ始めた。子どもたちはそれを冗談とは受け取らず、本気で藤原隊長を手伝おうとした。ここまでできたら絶対に膨らんだ状態が見たい、という子どもたちの強い意志が見られた。

バルーンが膨らむとき子どもたちは口々に「まだ大きくなるの?」とか「うわー地球みたい!」などと言いその大きさに驚いた様子だった。あらかじめ作ってあった小さな入り口から、一人ひとり「泡」の内部にもぐり込むと、子どもたちは寝転がったり、



画像提供、協力：山梨県立美術館、藤原隆洋

ビニールを押してみたり、大きな声を出して反響を確かめたりして、体全身、五感全てを使って「泡の中」を体感していた。誰かがバルーンの上で反射する蛍光灯の光が流れ星のようだと気付いたので、窓のブラインドを下げて「流れ星」を見やすくした。しばらく遊んだあと、一度空気を抜いて外に運び出し、広場でバルーンを膨らませると、子どもたちはまた中で見るのとは違う印象で自分たちの「泡」を感じているようだった。

③見解と課題

二つの事例は、一方は人形劇劇団、もう一方は現代美術作家という異なるフィールドで活動するアーティストによるワークショップだが、子どもの造形体験、プロジェクト形式の総合芸術活動という点では同じである。この二つの事例で子どもが培った能力とは何だろうか。

実践例1では、夢を語るというテーマや自然との対話というテーマを通して表現力や自信、価値を見いだす力が培われただろう。また自分たちの意志で活動を形作ることで主体性や柔軟性がはぐくまれたと思う。

実践例2では、スケールの大きな課題に向かうチャレンジ精神や仲間と協力して課題を成し遂げる喜びを得ただろう。また体全体、五感全てを働かすことで感性が育まれただろうし、数学的な構造を知り合理的に物事をとらえる力もついたと思う。

造形ワークショップは、他者と力を合わせながら、教科横断的な知識や技能を統合して問題を解決する力を養う。たまには失敗するし、上手くいかないこともある。しかしそれが、教室でのフォーマルな学習と違う良い点だと思う。何よりも友達と試行錯誤して特別な体験をしたことが子どもの記憶に刻み込まれ、美術とは楽しいものなのだという気持ちを育むことに繋がるだろう。

しかしながら学校現場でこういった機会を提供するには、いくつかの課題がある。・教師のみで行うには準備が大掛かりで負担が大きい。また技術的な不安もある。・アーティストを招く場合も、アーティストと学校をマッチングさせる制度が確立されておらず、人づてや紹介に依るところが大きい。・造形ワークショップは記録がなかなか蓄積されず知識や経験が継承されにくい。・資金面、人手的な問題、安全面の問題。・グループ制作では何もしない子が出てくる、などである。結果、造形ワークショップのような全人的な能力を培う造形活動は、依然多くが学校外施設で希望者のみを対象にして行われ、普通の小学校では、学校行事での共同制作など限られた機会に留まっているのが現状ではないだろうか。

IV. ドイツの美術教育の現状

ではここで比較検証対象として、ドイツの美術教育の現状を紹介したい。変革のただ中にあるドイツの美術教育の現状を知ることは、今後の日本の造形美術教育を展望する上でも有意義だと考える。

日本の教育にも影響を与えた PISA 調査だが、ドイツでは日本以上に子どもの学力低下が深刻であったことから、学習指導要領だけでなく教育システムそのものが大きく改革された⁷。調査の対象外であり成果が数値で示せない美術教育は、そういった教育の危機的な状況の中で、当初厳しい立場に立たされていた。事実、PISA ショック直後の KMK (Kultusministerkonferenz 各州文部大臣会議) の報告書には、芸術科目に関する記述はほとんどない⁸。

その後ドイツは調査毎に着実に順位を上げており⁹、教育改革の成果が上がり始めている。そんな中 2013 年 9 月に出された KMK の報告書¹⁰を見ると、ページを割いて美的教育の重要性が語られていて、必ずしも現在のドイツにおいて美術教育が辺縁的な科目とされてないことが読み取れる。ではこの 10 年間の教育改革の激流の中、ドイツの美術教育はどのようにして必須教科としての意義を獲得したか。その大きな要因の一つとして、全教科におけるコンピテンシー指向の学習への転換がある。

①コンピテンシー指向の学習

現在ドイツでは美術を含めた全教科が、コンピテンシーの獲得という共通の学習到達目標を持つことになっている。これは、PISA 調査を行う OECD からの要請によるところが大きい。OECD は、読み・書き・計算だけでは人間の発達や社会の営みをカバーするには充分でなく、より良い社会に貢献するにはキーコンピテンシー(表2)の獲得が必要であるとし、これを各国の教育機関に求めたのである¹¹。

このキーコンピテンシーを基にして、2003 年より KMK によって全国共通のナショナル教育スタンダードが順次作成された¹²。

結果的にこの教育の一元化は、ドイツの美術教育にとって必ずしもマイナスではなかった。なぜならこれらのコンピテンシーは、美術教育がもともと持っている性質に合致するからである。ドイツの教育学者エーデルシュタール(*15. June 1929)は、「創造的な行為をするときの美的葛藤のプロセスは、まさしくコンピテンシーを学ぶプロセスの模範と言える。作品を完成させようという一つの挑戦に対する答えを導き出すには、知識・理解力・技能・意欲・価値を見いだすこと・意思の強さなどを結

(1)	相互作用的に道具を用いる能力	(言語・シンボル・テキスト・知識・情報・技術)
(2)	自立的に行動する能力	(大局的に行動する。人生設計や個人の計画を作り実行する。権利・利害・責任・限界・ニーズを表明する)
(3)	多様な集団で交流する能力	(他人と円滑に人間関係を築く。協調する。利害の対立を御し、解決する)

表2 キーコンピテンシーの概念 (文部科学省「OECDにおけるキーコンピテンシーについて」より)

集させなくてはならないからである」と述べている¹³。

つまり現在のドイツの美術教育は、コンピテンシーの獲得という他教科との共通概念を通してその存在意義を社会に示すことに成功したと言える。

では実際の学習指導要領には、このコンピテンシーはどのように記されているだろうか。一例としてドイツ南部ザールランド州¹⁴の基礎学校の美術科学習指導要領¹⁵を見てみよう。ドイツは連邦制を取っていて、学習指導要領は各州独自にナショナル教育スタンダードを準拠して作成される。ザールランド州の学習指導要領では、獲得すべきコンピテンシーは、自己・社会、専門、方法の3つに分けられていて、実践領域(アクションフィールド)は9つに分けられている。教科目標は、実践を通してコンピテンシーを獲得し、創造的な人格を目指すとしてある。構造としては非常にシンプルで分かりやすい。以下はコンピテンシーの規定と学習指導要領の構造である。

②全日制学校の拡大と美術教育の変化

コンピテンシー指向の授業への転換と共に、ドイツの美術教育に大きな影響を与えたのが、全日制学校の導入である。

それまでドイツは昼過ぎに授業が終わる半日制の形態をとってきた。通常午後は子どもの興味や親の意向によって、習い事をしたりスポーツに通ったり学習塾など学校外の教育施設に通わされることが一般的である。これまでこういった学校外施設と学校は、互いに距離をとってきた。なぜなら午後の学習は家庭教育の一環だからだ。

しかし、移民や貧困層の子どもたちは、お金の掛かる学校外施設に通わされる機会が少なく、この教育の不均衡がドイツ全体の子どもの学力格差を広げていった。2001年のPISAショック以降、ドイツ政府は国策として、深刻な学力格差を回復させるために基礎学校の全日

自己・社会コンピテンシー	専門コンピテンシー	方法コンピテンシー
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の表現方法を見つけ、自らの経験や考え感じ方を表現の中に取り入れる ・制作やプロセスや作品に対して内省が出来る ・印象や考え、意見を的確に言葉に表す ・他者を観察し受け入れ、自分の作品と比較する ・異文化を感知し、寛容する ・芸術作品を鑑賞し、自身の視野を広げる ・共同で制作活動やプロジェクトを行い完成させられる 	<ul style="list-style-type: none"> ・自然と加工された身の周りの環境を識別する ・人や動物、植物、物体の特徴を認識し、視覚的に表現する ・技法や道具の使い方を知る ・色と形の特徴を知る ・造形的な字の美しさを知る ・専門的な概念を知り、活用する ・芸術作品を見て、その人物や背景を知り、作品鑑賞に生かせる 	<ul style="list-style-type: none"> ・用具や材料を使うことが出来、自分の作業スペースを整えられる ・多様な道具や技法を試すことが出来、自信を持ってそれらを創造的に活用できる ・多様なやり方、作業手順を知り、応用出来る ・観察、考察、言い表す、感じる、記録、展示する ・作品の鑑賞方法を身につける ・印象を言葉で適切に言い表せる

表3 コンピテンシーの規定 *ザールランド州 (筆者訳、作成)

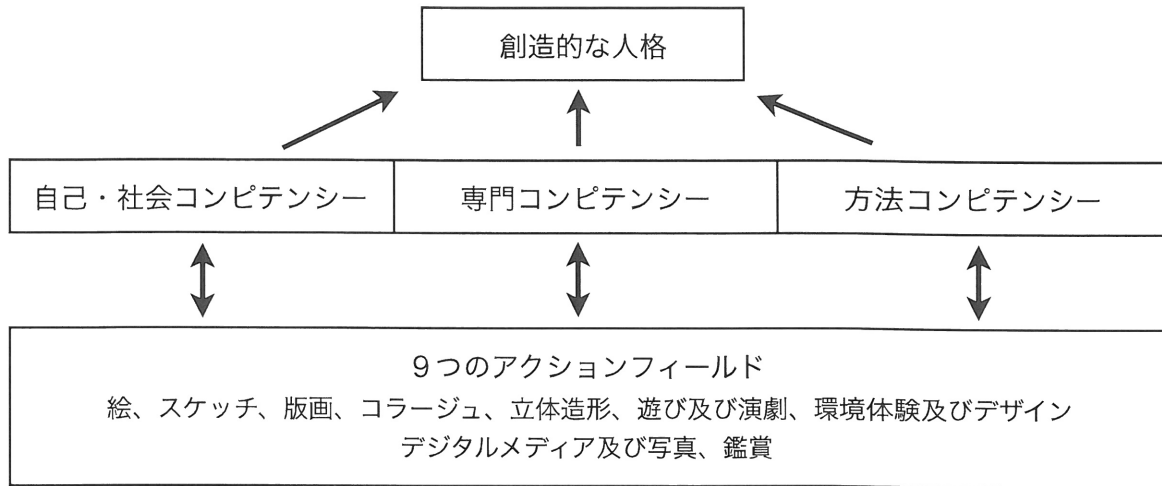


図2 ドイツの美術科学習指導要領の構造 *ザールランド州 (筆者作成)

制導入を推進することになる。

ただこれは当初、授業数を増やして学力をアップさせるというより、午後ぶらぶらしている子どもらを学校という教育施設に長く留めておく、という意味合いの方が強いものだった¹⁶。しかしこのことが、それまで学校と家庭教育に分かれていた学習の構造を、一つにまとめる契機となったのである。

現在多くの州の自由型全日制学校¹⁷では、午後は学習支援員が来て子どもの宿題を見たり補習を行ったりしている。また青少年芸術学校やスポーツ施設などから講師が来て、造形ワークショップを行ったりスポーツを行っている¹⁸。

学力の格差を正に端を発した全日制の導入は、結果として学校外の専門家たちを学校の中に呼び入れることになり、その結果多くの子どもたちが質の高いプログラムを平等に享受することに繋がっているのである。

③アートプロジェクトの広がり

学校と学校外の文化を結びつける様々な取り組みは、現在全ドイツに広がりを見せている。例えば、各州が主導し KMK から推薦を受ける『キンダー・ツム・オリュンプ(Kinder zum Olymp)』¹⁹というアートプロジェクトは、学校と文化の融合を基本理念に、小中学校での芸術家などが行うワークショップを支援している。これは地方文化財団(Kultur Stiftung fuer Laender)によって運営されている非営利組織で、ホームページには国内で行われた 3300 以上のワークショップの記録がデータベース化されている。また学校からの要望を聞きそれに見合った芸術家(パートナー)を紹介するなど、ワークショップの実現に向けた細かいアドバイスも行っている。オリュンプとは、神々が住むとされるギリシャの最高峰オリン



ポス山のことで、『キンダー・ツム・オリュンプ』には、「子どもたちを世界の頂へ」といったような意味合いがある。このような組織は現在、主要なものだけでも全ドイツで 11²⁰ を数える。

またノルトラインヴェストファーレン州では、全ての子どもに好きな楽器を一つ与えて習得させる『一人一楽器』(jedem Kind eine Instrument) という壮大で革新的なプロジェクトが進行している²¹。注目すべきはそれらの多くがまだ 10 年に満たない新しい組織であること、そして国や州といった自治体主導で行われていると言う点である。これは、ドイツの美術教育で頻繁に語られる「美術はぜいたくではない、必要不可欠なものだ」というモットーが、ドイツ社会で浸透し始めていることの表れではないだろうか。

ただ現在もバイエルン州など全日制学校導入に慎重な州があったり、任意の全日制学校では午後のプログラムに参加する子どもが必ずしも多くないことなど、いくつかの課題も存在する²²。

V. おわりに

本研究では主に学習指導要領などの制度面から、日本とドイツの造形美術教育の比較検証を試みた。検証を通して言えることは何だろうか。

大きな方向性として、現在の日本の造形美術教育は、学びのスキルをアップさせるところに軸足があると言える。つまりいろいろなアプローチで物事をとらえることで、ものの性質や多面性を知り、より深く具体的にイメージ出来るようになる。このことが、課題とされている応用力や表現力、コミュニケーション能力の向上に繋がると考えられているのではないか。一方ドイツでは、全人的な人格形成という大きな視点から美術教育をとらえようとしている。ここには国際的な教育の潮流に順応していこうとする意図と、子どもの学力格差を少なくし社会全体の文化・教育レベルを上げていこうというねらいがある。それぞれのお国柄や社会の事情が違うので、どちらのあり方が望ましいかは言えるものではない。ただ造形美術教育においては、「この時間内にこれだけやらなくてはいけない」という課題指向の考え方よりも、「この時間で何がどれだけ学べるか」という能力指向の考え方が良いと私は思う。なぜなら美術教育は、上手く作ったり見栄えよく作ることも、一人ひとりの成功体験を増やすことが大切だからである。そこから自分なりの美意識や自己肯定感が高まり、冒頭に記した作る楽しさや創造する喜びを感じられるのではないだろうか。

そうした造形の楽しさを誰もが享受できる形態として、本研究では造形ワークショップの可能性について注目した。造形ワークショップのようにプロジェクト形式で行う造形活動は、子どもの主体性や他者とのコミュニケーション能力、知識や技能を統合する応用力など、学習指導要領で重点とされている能力を包括的に育む。今後、学校現場でこのような取り組みが広がることを期待したい。

そのためには、多くのアーティストが学校でワークショップ活動がし易くなるような公的なバックアップの仕組みがあるといいだろう。様々な人たちとの出会いやインフォーマルな造形活動は、子どもの創造力と好奇心を刺激するに違いない。学校と美術館や地域の施設、そして自治体という三者の連携の深まりが、これからますます必要となる。

また同時にワークショップのデータを記録して共有したり、次の実践者に伝えることも重要だと考える。その際ドイツで行われているようなデータバンク化の試みは大いに参考になるだろう。たとえ様々なハードルでアーティストが呼べない場合であっても、知識や経験の共有がなされていれば、各学校レベルで質の高いワークショップの実践が可能になる。私自身今後どのような形でそういった活動に関わっていけるか、実践を通じた研究を続けていきたい。

「参考文献」

- 「造形教育体系—造形の基礎 1 遊び」真鍋一男 松本巖 齊藤清 監修 開隆堂出版
- 「工作・工芸教育の新展開」— 100年の歴史から21世紀へ— 石原英雄 橋本泰幸 編著 ぎょうせい
- 「子どもの感性と創造性を引き出す総合学習」福本謹一 初田隆著 明治図書
- 「美術科教育の基礎知識」福田隆真 福本謹一 茂木一司 編著 建白社
- 「おおきな木」シェル・シルヴァスタイン 翻訳：村上春樹 あすなる書房
- 「ピアジェの教育学」ジャン・ピアジェ著 原田耕平・岡野雅雄・江森英世 訳 三和書籍
- 「美術と視覚」上 ルドルフ・アルンハイム著 波多野完治・関計夫 訳 美術出版社
- 「多元的知能の世界」ハワード・ガードナー著 黒上晴夫 監訳 日本文教出版
- 「日本人の美意識」ドナルド・キーン著 金関寿夫 訳 中央公論新社
- 「人間の美的教育について」フリードリヒ・フォン・シラー 小栗孝則 訳 法政大学出版局
- 「PISA後の教育をどうとらえるか—ドイツをとおしてみる」久田敏彦 監修 八千代出版
- 「子どもの発達と感覚統合」A. Jean Ayres 佐藤剛 監訳 協同医書出版社
- 「幼児のワークショップ3 基本と展開」東山明 監修 明治図書
- 「Bauhaus Paedagogik」Rainer Wick DuMont Buchverlag Koeln
- 「Inklusive Reggio-Paedagogik」Sabine Jobst projektverlag
- 「Warum das Huhn vier Beine Hat」Knut Philipps Toeche-Mittler Verlag

「註」

- 1 小学校学習指導要領解説 図画工作編 文部科学省 日本文教出版 平成20年8月
- 2 PISA (OECD 生徒の学習到達度調査) 2003年度調査 文部科学省 (http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/04120101.htm)
- 3 美術科教育の基礎知識 福田隆真 福本謹一 茂木一司 編著 P.169 建白社
- 4 小学校学習指導要領解説 図画工作編 文部科学省 P.1
- 5 数学科の学力等に関する国際的な調査について 文部科学省教育課程部会 2004年 (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/013/siryo/04052601.htm)
- 6 「おおきな木」シェル・シルヴァスタイン 翻訳：村上春樹 2010年 あすなる書房
- 7 PISA後の教育をどうとらえるか—ドイツをとおしてみる— 久田敏彦監修 P.2 八千代出版 2013年
- 8 “KMK Bildungsbericht fuer Deutschland Deutsche Institut Internationale Paedagogische Forschung” 2003年
- 9 2012年のPISA調査では、ドイツは数学的リテラシー10位、読解力13位、科学的リテラシー7位と前回調査より全ての領域で成績が上昇した。
- 10 “Empfehlung der Kultusministerkonferenz zur Kulturellen

- Kinder und Jugendbildung” 2013 年 (http://www.kmk.org/fileadmin/veroeffentlichungen_beschluesse/2007/2007_02_01-Empfehlung-Jugendbildung.pdf)
- ¹¹ OECD における「キーコンピテンシー」について 文部科学省 2013 年 (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryu/05111603/004.htm)
- ¹² 2003 年 12 月第 10 学年にドイツ語、数学、第一外国語のスタンダード、2004 年 10 月第 9 学年と第 1～4 学年にドイツ語と数学のスタンダード、同年 12 月 10 学年に生物、科学、物理のスタンダードが順次導入された。
- ¹³ 2007 年 6 月ドイツザールランド州での講演 “Mehr Chancen fuer Kinder” (子どもに多くのチャンス) での言葉。
- ¹⁴ ザールランド州は人口 1,013,352 人、面積 2,569,69km²のフランス国境に接する工業の盛んな州。現在州内の 92%の学校が全日制に移行している。本研究では、ドイツ国内でも教育改革に積極的な州であることから比較対象として選んだ。
- ¹⁵ “Kernlehrplan Bildende Kunst Grundschule” ministerium fuer Bildung Saarland 2011 年 (http://www.saarland.de/dokumente/thema_bildung/Kernlehrplan_BildendeKunst_Grundschole_Saarland_2011.pdf)
- ¹⁶ ショック療法の功罪～ドイツにおける低学力問題をめぐる評価の政治～ 近藤孝弘 2010 年 (<https://www.cret.or.jp/files/a0b2cfe66b1a6064449d976dad6b6c3a3.pdf>)
- ¹⁷ ドイツの全日制学校は現在義務型 (5.5%) と自由型 (36.2%) と分けられている。義務型の中でも完全義務型と部分義務型に分けられている。*括弧内はドイツの全ての小学校の中での比率。
- ¹⁸ ザールランド州の自由型全日制学校の場合、美術の時間は午前の必須授業では週 3 時間、午後の支援活動 (音楽やスポーツを含む) が週 5 時間となっている。
- ¹⁹ “Kinder zum Olymp!” (<http://www.kinderzumolymp.de/>)
- ²⁰ データベースの中には建築や演劇、ダンス、ファッションなど専門分野に特化したものもある
- ²¹ “Jedem Kind ein Instrument” (<https://www.jedemkind.de/>)
- ²² StEG (Studie zur Entwicklung von Ganztagschulen) の調査では、2013 年の時点で全ドイツの 41.7%の子どもが全日制学校に参加している。その内の 61%が 5 日、80%が 3 日程度の参加にとどまる。